

ナイフ

サミ
スウェーデン・ヨックモック
長さ 32.3 cm、20.5 cm

平成7年2月7日～3月14日

「北方民族の船 北の海をすすめ」について

2月7日から1か月あまりにわたり、第9回特別展「北方民族の船 北の海をすすめ」を開催しました。

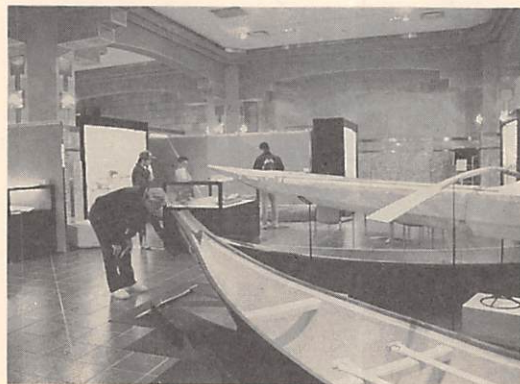
北方の諸民族は北の自然の中でくらすために、生活のあらゆる面において工夫をし、高度な技術を発展させてきました。そして船も、その知恵と技術をこらした実に見事な生活道具です。

魚やクジラ、アザラシや貝などを手にいれる生業活動では船が大きな役割を果たしています。船がなければせっかくの豊かな北の海の資源をいかしきることはできなかったでしょう。

また移動のときにも船はかかすことができません。イヌイトのウミアック（大型の皮船）はクジラ猟でも活躍しましたが、移動の季節には多くの荷物を積んで目的地を目指しました。

船は、アザラシやトナカイなどの獣皮やシラカバなどの樹皮、流木など各地域の特性をいかした材料で、狩猟や漁撈あるいは移動、交易といった目的に応じてつくられ、多様な形をとり、またさまざまな機能をになってきました。もしも船がなかったら、一年の生業のリズムも、また民族の移動や文化の広がりも、ずいぶん違っていたものになっていたでしょう。

この特別展では北方民族が使用した船を中心に展示し、船が生活の中ではたしてきた役割について紹介しました。



展示は、アルゴンキン・インディアンの^{シラカバ}白樺樹皮船、ヌートカの丸木船など実物の船を5点、アイヌの板綴り船（イタオマチブ）等の模型を約30点、このほか櫂や漁撈具など船に関連した資料を、あわせて全134点で構成しました。

船をつくる

北方民族の船の種類はおおまかにわけて、丸木船、板船、樹皮船、獣皮船の四つがあります。丸木船、板船、樹皮船は木が豊かな地域で、獣皮船は植物があまり豊富ではない地域でつくられました。樹皮船と獣皮船は同じように「皮」をつかうものですが、つくりかたは全く違います。樹皮船はさきに樹皮で船の形をつくって、あとから^{かんざい}肋材をいれていくのに対して、獣皮船ははじめに流木で船の形をつくり、そこに獣皮をはっていきます。この代表的なものがカヤックです。また、北アメリカの北西海岸では、シーダー（ヒノキ科の樹木）の大木を材料にした大型の丸木船がつけられました。この丸木船には色が塗られたり、彫刻がされるなどの装飾がなされることもありました。

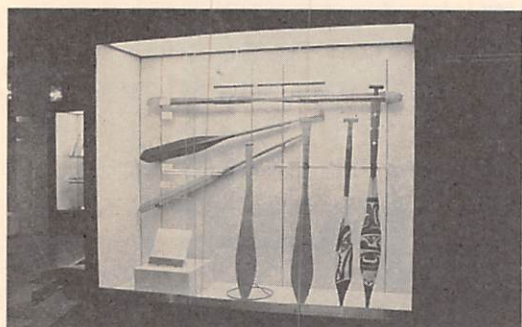
つくりかたについては「北方民族の船をつくる」と題し、クリー・インディアンの樹皮船、スレーブ・インディアンのヘラジカ皮ボート、イヌイトのカヤック、エストニアの丸木船、サミの川船の5つの船のつくりかたを紹介したビデオを上映しました。

カヤックの多彩な世界

カヤックは北極海からベーリング海峡、北太平洋にいたる広い範囲で、イヌイト、アリュート、チュクチ、コリヤークなど多くの民族の間で使われていました。木でつくった枠に、動物の皮をなめたものを、座席口部分をのこして全面にはってつくります。地域によってデザインは異なっていました。ベーリング海峡周辺のものには船首に穴がつけられていたり、ふたまたになっていたりと

るなどの特徴があり、沖の荒波にもたえられえるような幅広なつくりになっていました。グリーンランドでは船首と船尾、底、^{かい}櫂の先を鯨骨で保護することもありました。速度がでやすいように、細長くなっています。現在カヤックは世界中でスポーツとして多くの人びとに愛好されています。

展示ではカリブー（トナカイ）皮はりのカヤックのほか、各種カヤックの模型を展示しました。模型とはいえ大変精巧なもので、カヤックの構造がよくわかりいただけたことと思います。



櫂（かい）のコーナー

船を進ませる道具には、^{さお}櫂、棹、帆があります。イヌイトのカヤック用のかいは両方に水かきがついているものがよくもちいられましたが、片羽のものが使われる地域もありました。北西海岸インディアンの間ではイチイやイエロー・シーダーの木から櫂がつくられました。棹は川で船をすすませるときに使われます。

ここでは、イヌイトの2つの違ったタイプの櫂や北西海岸インディアンの彫刻がほどこされたものなどを展示しました。

交易

北方地域における交易はふるくから隣接する民族のあいだでおこなわれていました。18世紀から19世紀には欧米の毛皮商人が北方地域へ進出し、さまざまな民族と金属製品やビーズ、煙草、茶、

コーヒーなどと毛皮類の交易をおこなってきました。

アイヌやウイльтаのガラス玉の首飾り、スレーブ・インディアン^{スレーブ}のビーズベルト、コリヤークの煙草入れ、ラッコの毛皮などを展示しました。

この他に、船が彫刻されたアイヌの^{ほうしほべら}捧酒篋、船をモチーフにしたイヌイトの石彫刻や版画等を多数展示しました。

また、現在函館市北方民族資料館に展示されているアリュートの3人乗りバイダルカ（カヤック）の実測図を展示しました。実際に自分でカヤックやカヌーを作っている人たちから大変好評でした。

「いろいろな民族のものに対する考え方が北方民族の船をとおして感じる事ができました」「北方民族の人たちが日常いかに船と深く関わってきたか、その船を一堂にみる事ができてよかった」「今流行のカヤックが北方民族の発明だとわかった」などという感想がきかれました。

最後に特別展の開催にあたり、ご協力いただきました、市立函館博物館、函館市北方民族資料館、北海道開拓記念館、門崎允昭氏、児玉マリ氏、吉田悟郎氏をはじめ、特別展示図録の原稿執筆をいただいた方々に心から感謝申し上げます。

（学芸課 笹倉いる美）



○講演会 (2月12日)

イタオマチブを復元する

講師 / (社) 北海道ウタリ協会理事 秋辺 得平 氏

第9回特別展「北方民族の船 北の海をすすめ」に関連して、北海道ウタリ協会理事の秋辺得平氏を講師にむかえ、講演会を開催しました。

秋辺氏は1989年に、およそ200年ぶりにアイヌの海洋船であるイタオマチブ(板綴り船)を復元しました。講演会ではその復元の過程について、ビデオテープや模型などを用いながらお話しいただきました。秋辺氏が復元したこのイタオマチブは現在は大阪にある国立民族学博物館に所蔵されています。以下は要旨です。

「アイヌには丸木船だけではなく、海に行く大きな船があったんだよ」このことを教えてもらって以来イタオマチブをつくってみたい、そう思っていた。

平成元(1989)年に、とうとうイタオマチブをつくることになった。

船体になるのはカツラの木で、この木は繊維がからみあっていて船の船体に適している。3月に東京大学の富良野演習林で、木を切り出した。木を切り出すのは冬がいい。夏は木が水をすいあげているので、あとからくるってしまっていけない。富良野で、おおかたの形をつくり荒彫りする。現代文明の利器、チェーンソーをつかっても大変な作業で、必死で彫り抜いた。

釧路の達古武沼湖畔につくった造船所へ、荒彫りをしたものを運び入れる。水が造船所の近くにあることはとても重要だ。つくっていく途中で水に浮かべてみる必要があるからだ。

実際にこのイタオマチブをつくったことがある人は現在いないし、実物も残っていない。およそ200年前にかかれた蝦夷生計図説などの古文書をたよりに作業をすすめていく。

錨は蝦夷生計図説のとおりエゾマツの枝の部分に石をゆわえてつくった。沈めると、先に石のほうに着底し、あとから枝の方がゆっくりとしずみ、錨綱を引くとうまい具合に錨の先が海底にさ



さるようになる、という実にユニークな構造をしている。また、イタオマチブを操る櫂は、ごく狭い幅があればいいこともわかった。

下準備にも相当時間を要し、その年8月14日の世界先住民族会議開催中にいよいよ進水式をおこなう。全長は14.5メートル。1~2トンの荷物なら楽につめそうだ。船首と船尾に御幣(アイヌの儀礼具)をたてる。我ながら見事だとおもった。こういう具合にできあがるとは想像していなかったので本当にうれしかった。

この船の底にはなにもついてない。それで何か水面に浮かんでいても、乗り越えて海面をすべるようにいく。一方で、横風がくると横すべりをしてしまう。船足が速いが操船は難しい。操船の易しさよりも、危険を回避することを選んだのだ。アイヌは陸がみえるところを航行していた。天気を読む才能がなかったら、この船を乗り回すことは出来なかっただろう。

とにかく、すごい船だなということ、多種多様な造船技術をアイヌがもっていたことがわかった。もし200年の間、船をつくることをつづけていたら、アイヌの造船技術はもっと発展していったのではないだろうか。しかし、いまでもこの船を復元することは、船を考えるうえで、あるいは海とか気候とか自然を考えるうえでも、多くのことを示唆してくれるように思う。

これからさらに多くの船をつくり、詳しい記録を本にできたらと思う。そして実際に樺太へ行ってみたいと考えている。

○講座（1月22日）

「みやげ」の文化人類学

講師／齋藤 玲子（当館学芸員）

近年、「観光学」というのが注目を集めてきており、社会学・歴史学・民族学などの分野から経済活動としてだけではとらえきれない「観光の文化」の研究がなされてきています。本講座では、みやげという「物」をとおして民族文化が観光とどう関わってきたかを紹介し、ツーリスト・アートと呼ばれる「観光芸術」を民族学の研究でどうとらえていくかということや、博物館の役割についても考える機会にしたいという意図で行われました。以下にその要旨を報告します。

日本（本州）でみやげの習俗が一般に広まったのは、江戸時代中期以降のお伊勢参りの発展と関連が深いといわれている。北海道においては、江戸時代末期に多くの探検家や幕府役人などが来るようになり、蝦夷みやげともいうべきみやげものの需要があったことは十分に想定できることである。実際、アイヌの木彫りの腕を見初めた和人たちが、筆筒、筆軸、手拭掛、盆、茶托等を求めて持ち帰ったことや、それらが献上品となっていたことが知られている。19世紀後半、アラスカでも捕鯨やゴールド・ラッシュ等による欧米人の流入が、先住民の儀礼具や日用品であった牙製彫刻品やバスケットをみやげものへと変えていった。

売ることを目的に作られた工芸品類は、本来のものとは、デザインや素材が小形化・簡略化・強調化・華美化するなど変化してきている面もある。しかしそれらは、買う側の人々が持つその民族文化に対するイメージも反映されていると考えることができる。そして、製作技術やモチーフなどの伝承が、みやげものとしての需要に支えられ、観光に関わる中で受け継がれてきたことも事実であろう。また、近年では工芸品類の製作が、民族のアイデンティティを自覚する手段となってきたり、芸術家として自立する人も輩出してきている。

博物館においても現代の民族文化を残すという観点において、これらの工芸品に関する研究を進めなければならないと考えている。

○講座（3月12日）

北方の漁撈文化～氷下漁について

講師／渡部 裕（当館学芸課長）

北方諸民族は陸獣狩猟、海獣狩猟、漁撈、採集、さらにトナカイ飼育などからなる生業要素を、自然環境や伝統文化の違いによってさまざまに組合わせてきました。一般的に狩猟は食料獲得の手段として安定性を欠く場合が多いのですが、漁撈は比較的安定した食料をもたらします。今回の講座では、漁撈文化のなかで、冬季から初春にかけて行われる氷下漁をとりあげ、それらの漁撈活動の在り方と生業における位置づけが検討されました。以下に要旨を報告します。

漁撈活動が行われる場として河川・湖沼、海があり、漁撈が行われる時期も各魚類の生活史や漁撈の場を反映し、周年行われる場合から限られた季節に行われるものまでみられる。網、釣、籠罟、ヤス、石干見などによって捕獲され、乾燥・燻製・発酵などの方法で保存のための加工が行われていた。

とくに北太平洋沿岸地域ではサケ類の捕獲が多くの地域で一般的であり、サケ類は沿岸の諸民族の重要な食料となってきた。北大西洋ではタイセイヨウサケが湖河性の魚類の代表であり、北極海沿岸ではホッキョクイワナが河川・湖沼と沿岸海域を季節的に遡上・降海を繰り返して40～50cmに成長する。サケ類については遡上時に大量に捕獲され、ホッキョクイワナは遡上・降海時に捕獲される。ニブフヤコリヤークの具体的な事例から膨大な量のサケ類が捕獲され、人間ばかりかイヌの重要な食料となっていたことがわかる。

このような中心となる漁撈活動に加えて行われる氷下漁は、食料が最も不足する冬の終りから初春にかけて、新鮮かつ貴重な食料をもたらす点で重要である。

受講者のなかに網走湖で漁業をされている方がおられ、アサバスカ・インディアン^{アサバスカ}の氷下網漁の方法が現代の網走湖の氷下網漁と同じであると指摘されたが、このことは北方の漁撈技術が古い時代から確立されていたことを示すものであろう。

平取町立二風谷アイヌ文化博物館で続けている本シンポジウムは、第一期「アイヌ伝統文化の今日的継承」の最終年次にあたる3回目ではテーマは「伝統文化を受け継ぐための環境と方法」でした。

1日目には北海道大学教授(当時)の辻井達一氏が「北の植生と文化」というテーマで特別講演を行い、植物が衣食住や薬などのさまざまなものに用いられる事例について紹介し、民族の文化はその地域の植生に規定されている部分が少なくないのでその見直しと活用を、提言されました。

2日目の講演は国立民族学博物館教授の大塚和義氏が「アイヌ文化の継承と民族学研究」という演題で、民族学研究の歴史を概観され、多くの方が民族文化について協議できるように研究の成果を公開していくことが大切だと述べられました。

二風谷アイヌ文化博物館シンポジウム

2.27・28 於：平取

基調提言では北海道ウタリ協会・教育文化部会会長の秋辺得平氏から「ウタリ協会を中心とした文化活動の現状と課題」として、協会は発足から70年代までは福祉に重点的に取り組み、それらの活動を経て、文化活動が重要なものと位置づけられるようになったのは比較的近年になってからだが、特に国際先住民年以降、内外から文化事業に対する期待は高くなっていると述べられました。

以下、パネル討論では主に現場で文化継承活動に携わる立場から、高坂京子氏「言語と舞踊の伝承活動を通じて」、佐藤昭弘氏「アイヌ文化に関する授業実践を通じて」、高橋規氏「記録資料の制作とその活用」、森岡健治氏「考古学的調査の成果とその活用」、斉藤公子氏「アイヌ文化を活かす自治体の施策を」、貝沢薫氏「地域生活に根ざした文化継承を」として、事例報告やこれからの課題について熱心に討議が行われました。

今後も第三期までのテーマが既に計画されており、シンポジウムの益々の発展が期待されます。

(学芸課 齋藤玲子)

平成7年度の主な行事

- ・ 7/1 第10回特別展
～9/8 『大河アムールの民・ナーナイ』
—アムール民族芸術博物館収蔵資料展—
- ・ 8/5 講習会『ドンカーンの木彫り教室』
講師 A. P. ドンカーン氏(彫刻家・アムール民族芸術博物館長)
- ・ 8/6 講演会『ナーナイ・現在から未来へ』
講師 A. P. ドンカーン氏
- *講習会・講演会は14時から当館講堂で行います。
- ・10/4 開館5周年記念企画展(移動展)
～10 『ノーザン・ピープルズ』
～北方地域にくらす諸民族～
会場(予定) 道民活動センタービル(かでの2.7)
1階展示ホール
- ・10/7 講演会『極北のインディアンについて』
講師 原ひろ子氏(お茶の水女子大学教授)
会場(予定) 道民活動センタービル(かでの2.7)
- ・11/30 博物館フォーラム・博物館と地域研究
『アイヌ文化の成立を考える』
会場 網走市サイクリングターミナル
講師 吉崎昌一氏(静修女子大学)ほか事例研究
- ・12/27 『ロビーコンサート'95』
『青少年のための室内楽の夕べ』
共催(財)山田記念青少年育成財団
- ・ 2/6 開館5周年記念企画展『ノーザン・ピープルズ～北方地域にくらす諸民族～』
- ・ 2/17 講演会『モンゴロイドの拡がりとその文化』
「ホモ・モビリタス(人間)の旅」
講師 片山一道氏(京都大学助教授)
「世界・宇宙観の発展」
講師 大林太良(当館館長)
13:30～16:30当館講堂にて
- ・ 3/3 講座『ウイルトアの文化を語る』
講師 北川アイ子氏(資料館ジャッカ・ドフニ館長) 14:00～当館講堂にて

Q

サミには鞘や柄に彫刻を施した独特の形のナイフがありますが、素材や用途について教えてください。

A 北方諸民族にとって切ったり削ったりすることのできるナイフは生活になくはない道具です。スカンディナヴィア半島やフィンランド北部のサミにとってもナイフは男性にも女性にも必需品となっています。小さな子供のうちからナイフを使い、最も慣れ親しんだ道具の一つとなっています。サミのなかでも移動生活をしながらトナカイ飼育を行う集団は、調理や食事、道具の製作、トナカイの屠殺や解体など生活のあらゆる面でナイフを利用してきました。サミの人びとは地域内の取引によるほかは、かなり自給的な生活を行ってきましたが、塩や布などとともにナイフの刃は外部の社会から取引によって手に入ってきました。

トナカイの角やシラカバ類の瘤からナイフの柄や鞘を作ります。もちろんこのような堅い材料の加

工は男性の仕事です。とくにトナカイ角製の鞘には透かし彫りを含む精緻な彫刻がほどこされ、サミの工芸の技術の粋が注がれているといつてよいものでしょう。装飾は幾何学模様のほかに具体的なトナカイ、クマなどが線刻される場合もあります。男性は大きめのナイフを、女性は小さめのナイフを使い、常に腰にさげて携行します。女性はナイフのほかに、針入れ、ハサミ、錐、指貫、縫糸、スプーンなど裁縫や食事に必要な道具をひとまとめにして、腰につり下げます。(学芸課 渡部 裕)

【研究紀要 第4号】について

「北海道立北方民族博物館研究紀要第4号」が刊行されます。内容は次のとおりです。

大林 太良

「日本の神話伝説における北方的要素」

Austerlitz, Robert (村崎恭子解説) "Report on Sakhalin, Summer 1990, and Thoughts on Language Attrition."

一ノ瀬 恵

「コリヤーク語の音韻に関する報告」

風間伸次郎

「ナーナイ語の親族名称について」

渡部 裕

「北東アジアにおける海獣狩猟(Ⅱ)利用と精神文化を中心に」

佐々木 亨

「Museums & Marketing 2

ミュージアムのマーケティング・プロセスモデル構築に向けて(1) -北方民族博物館の事例から-

齋藤 玲子

「北太平洋沿岸地域における植物性繊維製品についての考察 編物を中心とする物質文化研究」

井上 紘一(訳)

「バリのシベリア」(ローン、タチヤナ・ベトロヴナ著)、「シベリアの原住諸民族と新ロシア」(シシュロ、ボリス・ベトロウィチ著)

佐々木 亨・笹倉いる美

「のりりすと・ミュゼランド1994 -北方研究・博物館学研究データベース-

第10回特別展

【大河アムールの民・ナーナイ】-アムール民族芸術博物館収蔵資料展-

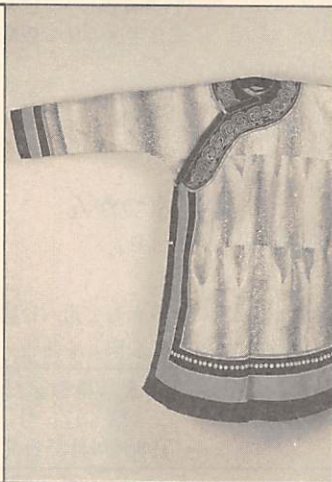
7年7月1日(土)~9月8日(金)/休館日 月曜日

観覧料

一	般	高校生・大学生	小学生・中学生
250(200)円		80(50)円	50(30)円

かつこ内は10人以上の団体の場合

アムール川(黒龍江)下流域を中心に暮らすナーナイ。中国名では赫哲(ホジェン)と呼ばれています。ナーナイは川と森の民で、長い間漁撈(ぎょろう)と狩猟を生業として暮らしてきました。本展示はロシア・ウラジオストク市の私設アムール民族芸術博物館の協力で実現するもので、ロシアでの伝統的なナーナイの生活・文化とともに、新しい体制のもとでの暮らしを紹介します。また中国側の同民族の今日の生活も、映像と写真で紹介し



執筆者ならびに出版社から 寄贈を受けた書籍 (1~3月)

風間伸次郎採録・訳注『ナーナイの民話と伝説』小樽商科大学言語センター
1995

Iwao Ushijima & Cynthia Neri
Zayaseds. *Fishers of the Visayas*.
CSSP Publications. 1994

原 暉之ほか『ロシア極東への視座』
北海道大学スラブ研究センター 1994

主な来館者

- 1/17 大島慶久氏 (北海道開発政務次官)
2/10 高橋裕氏 (芝浦工業大学) 他
2/16 藤田郁男氏 (JICA専門家・フィリピン大学理数科教師訓練センター)、下野洋氏 (国立教育研究所)、アルビン・フローレス氏 (フィリピン大学)
2/21 木島輝夫氏 (北海道担当特命全権大使)
3/19 小林繁樹氏 (東京造形大学)
3/25 阿部譲二氏 (作家)

観覧者動向 1月~3月

	常設展	特別展
1月	766名	-
2月	1,669名	811名
3月	1,824名	607名

第9回特別展の観覧者数は1,418名でした。また、平成6年度の延べ観覧者数は53,995名でした。

みんぞく

こうこ

はくぶつかん

in Hokkaido (1月~3月)

- 1/4 文化伝承の拠点として道内に国営「アイヌ民族公園」を新設・

1996年にも調査費を予算計上すると政府が方針を決定/D

- 1/14 オホーツク流水館がリニューアルオープン/A B
1/16 阿寒でアイヌ民族伝統の猟法でシカ狩り・獲物はなくとも厳粛に儀式/D, Mほか
1/22 北海道考古学会の遺跡調査報告会について・立ち見が出るほどの盛会 (木村英明氏筆) /Y
1/29 北海道ウタリ協会主催の「アイヌ民族文化祭」が室蘭市で開幕古式舞踊やアイヌ語劇などを披露/Mほか
2/3 道立オホーツク流水センターで企画展「大河アムールーそしてオホーツクにそそぐ」が開幕流水のふるさとの歴史や生活を多角的に紹介/D
2/4 北海道ウタリ協会札幌支部と札幌市共催の「アイヌ民族文化祭」が札幌市で開幕・伝統工芸の実演も/Dほか
2/7 紋別市の北方圏国際シンポジウム・「氷海の民」分科会ではアイヌ民族の口琴・舞踊・ユカラなども披露/D
2/18 英国で初のアイヌ文化展・大英博物館分館の人類博物館でアイヌ民族博物館のメンバーが民族舞踊を披露/D
3/6 「大陸に続く道 日・中・口歴史・文化交流研究から」北海道開拓記念館の事業の成果を紹介/17まで10回シリーズ/D(夕)
3/7 来日したサハリン先住民族ウイルトとニブフの女性・網走で墓参や親族と再会へ/各紙
3/9 来日中のサハリン先住民族が日本政府に謝罪と戦後補償を求める要望書を提出/各紙
3/14 ルポ「アコロイタケ (私たちの言葉) アイヌ語の現場から」

/17まで4回シリーズ/A S

- * A B 網走新聞
A S 朝日新聞 (道東北網版)
D 北海道新聞 (オホーツク版)
M 毎日新聞 (道東道北版)
Y 読売新聞 (北網版)
複数紙掲載の場合は、扱いの大きい方を紹介しています。

その他の行事報告

○講習会

2/19, 26 「ワークショップ3」

インディアン・のビーズベルト
講師 青柳文吉・笹倉いる美
(当館学芸員)

◇職員の異動◇

転出 (4月1日付)

副館長 青野 昌勝

(網走教育局長へ)

転入 (4月1日付)

副館長 佐藤 軍治

(釧路教育局次長から)

編集後記

新年度にあたり旧年度をふりかえるというところですが、今年に入ってから数か月、あまりに衝撃的な災害や事件が起こり、以前のことは薄れかけている…。マスコミに流されがちな世の中では、しかたのないことなのか。阪神の震災では、多くの博物館や美術館での被害もお聞きしました。昨年の北海道東方沖地震では当館は無事だったものの、被害を案じて遠くからお電話いただいたことを思い出しました。関西の被災地の方がたには心よりお見舞い申し上げます。

見栄えも大事だし、タイムリーなことも必要だけれど、基礎の見直しをじっくりと再考する時期かもしれないと、自戒するこのごろです。(齋藤)